

■ 咸臨丸全国まちづくりサミット ■

住民の努力と夢が結実

関係地域との絆生まれる

【木古内】幕末の重艦「咸臨丸(かんりん丸)」が木古内町のサラキ岬沖で座礁、沈没してから140周年を迎えたことを記念し、「咸臨丸全国まちづくりサミット」が9月24、25の両日、同町で開催された。全国のゆかりの地の代表が一堂に会し、咸臨丸が結ぶ縁を確認したほか、目玉の朗読劇も成功し、閉幕した。主催した町内の民間団体「咸臨丸とサラキ岬に夢みる会」(久保義則会長)は「住民の力で事業を成功させることができた。今後の活動の弾みになった」と喜んでいる。(松宮一郎)

事業の中心となった同会は、2004年10月に発足。咸臨丸を地域活性化の資源にしようと活動を展開している。国道228号沿いにあるサラキ岬の公園では、建造団オランダにちなみ、チューリップの植栽など環境整備に努めている。

イベントは、咸臨丸が沈没してから今年で140周年を迎えたことから、同会などが企画。咸臨丸の歴史、文化的な価値を発信するともに、関係地域と連携を深め、互いにまちづくりや地域活性化に生かしていく契機としたことの思いもあった。

平洋を横断してから150周年の節目の年で、咸臨丸に注目が集まっていたことも同会を後押しした。今年3月に同会や町内の各団体を中心に実行委が発足し、準備を開始した。今回の事業は、咸臨丸を追悼する記念式典と「全国まちづくりサミット」と銘打ったフォーラム、町民手作りの「朗読劇」が柱。そのほか、咸臨丸について学ぶ講演会が開かれた。今回の事業は、咸臨丸を追悼する記念式典と「全国まちづくりサミット」と銘打ったフォーラム、町民手作りの「朗読劇」が柱。そのほか、咸臨丸について学ぶ講演会が開かれた。



咸臨丸を地域活性化に結び付けるための方策などを話し合った「全国まちづくりサミット」。「いずれは海底に眠る咸臨丸の調査を」などのアイデアも出た

は初めてのことであり、会場では盛んに意見が交わされた。また、「共同宣言文」も採択。①文化や人の相互交流の促進のサミットの継続開催②掘り起こしを含めた歴史的調査を行う③という内容で、関係地域同士の縁をさらに強めていくことを確認した。同会では「今回は木古内に来てもらったので、次は出掛けていく」としている。

ら演出家を招いたほかは全て町民による手作り。キャストも演劇には縁のない素人の町民が務め、裏方も合わせると約80人が舞台づくりに参加した。出演者は本番で練習の成果を発揮し、感情を込めたセリフで、咸臨丸の一生を表現。終演後、観客から大きな拍手が受けると、キャストとスタッフは笑顔を浮かべた。舞台にも出演した久保会長(80)は「準備など苦労したがいがあった。朗読劇に関わった人たちは自信を深めた」と振り返る。同会事務局長の多田賢淳さん(59)は「いずれはサラキ岬で野外劇として上演するのが夢だ」と語る。

関係地域との絆を強めるという目標を達成するなど、イベントの成功は同会の長年の活動の成果が結実した結果で、来場した町民をはじめ、内外から高い評価を得た。しかし、多田さんは「今回の事業をその場限りのセレモニーで終わらせない努力をしなければならない」と強調する。「サミットや朗読劇は活動の節目にはなったが、あくまで夢の通過点。共同宣言文の通り、関係地域との交流を進めていく」と語る。また、「座礁、沈没した原因などは謎に包まれたまま。今後は勉強会などを通して、謎の解明に取り組んでいきたい」と意気込んでいる。